

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (56) ダビデの王国

ダビデは聖書の記述に寄れば、紀元前約 1040 年—970 年の 70 年の生涯を送り、ユダの王としては 30 歳で即位し、1010-1002 の 7 年間、全イスラエルの王としては、1002-970 の 33 年間の統治、計 40 年間王位にあったと記されています。



テル・ダン石碑

ダビデが、実在の歴史上の人物ではないかと思わせる、聖書以外の初めての文献とされているものがあります。

それは 1993-1994 年に、テル・ダンで発掘された、石碑です。テル・ダンはイスラエル北部の町で、ダン族によって奪い取られた旧ライシュと言われたところです。破片をつなぎ合わせ、解読が進みました。古アラム語で書かれていて、アラム・ダマスカスのハザエル王 (870-750 BC) の戦勝を祝う碑文です。この中にダビデ本人ではないのですが、「ダビデ王朝」と読む文字が彫られているのです。現在はイスラエル博物館所蔵です。

これまで聖書に登場する人物を述べてきましたが、いずれも伝承による人物で、神話的、伝說的、比喩的、寓話的フィギュアでした。それなのに、すべての人物は個性、特性、使命をそれぞれ豊かに持っていることに驚きます。しかも、立派だと褒め称えているのではなく、ひとりの人間として、様々な苦しみや悩みを負い、環境に翻弄され、立ち向かい、闘い、生きるために懸命に神に関わった人間像であることを改めて感じさせられます。永遠の王と褒め称えられるダビデが登場しますが、聖書ではやはり、神との関わり、信仰者としてのダビデの姿を伝えているのです。



イスラエルは左の聖書地図にあるように、サウル時代 (紫色)、ダビデ時代 (青色)、ソロモン時代 (茶色) というように、嗣業の土地として住みついた土地を基盤とし、王権を振るう王国の領土として、拡張していきました。

この場所は、東にメソポタミア (バビロン)、北にアッシリア、南にエジプト、そして西に地中海、という交通の要衝となる肥沃な三日月地帯と呼ばれる地域の、最も狭い地帯です。ここを通らずにはどこへも行けないほど重要な要となる土地です。ダビデはエブス人の住むシオンの要害であったエルサレムを陥落させ、そこに都を樹立しました。

ダビデはこの要害に住み、それをダビデの町と呼び、ミロから内部まで、周囲に城壁を築いた。ダビデは次第に勢力を増し、万軍の神、主は彼と共におられた。(サム下 5:9-10)

ダビデの最大の魅力は「信仰に生きる指導者」という点です。後代の預言者はダビデを「主の僕」、「神の人」として語り継いでいます。最強の人間が神の前にへりくだる姿こそ、イスラエルの理想の人間像、神と人に愛される姿です。ダビデへの尊敬と崇拜は、1000年の時間を経ても、変わりませんでした。ダビデの子である、新しいメシアを、待望し続けたのです。マタイによる福音書の冒頭に、系図を載せ、ダビデの子として、ファミリー・ツリーの中にイエス・キリストを登場させています。イエス様御自身は「このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのであれば、どうしてメシアがダビデの子なのか。」(マタイ22:45)と反論しておられます。